

2004年6月  
2008年7月微調整  
村夏至作成

## 『日本人のしつけは衰退したか』

(広田照幸著、講談社現代新書、1999年) 読書メモ

青少年の凶悪犯罪が増加していると言われ、それは家庭の教育力の低下が原因であるというわさとセットで語られています。しかし、本当にそうなのでしょう？この本は、そのことを丹念に調べて、一般に語られている常識が必ずしも正しくない、というか、その常識がますます現状を悪化させている可能性があることを説明してくれている好著(206ページの新書)です。実は、この本に関しては、これまでも何度か資料化しようと試みたのですが、どうもまとめにくかったのがそのたびにやめてしまっていました。長崎で同級生殺人事件があって、改めて挑戦してみたのです。というわけで、この本は3、4度も読んでしまいました。本当は、家庭の教育力を語る人には少なくとも基礎資料として読んでもらいたい本ですし、私なりのまとめ方なので、読み込みが足りなかったり、誤読もあるかと思えます。この本を読んでみようかと思うきっかけになってもらえれば、ということでご一読ください。

この本が問い直そうとしているイメージ

イメージ1 家庭の教育力は低下している。

イメージ1-A 昔は家庭のしつけがきびしかった。

イメージ1-B 最近はしつけに無関心な親が増加している。

イメージ1-C 家庭は外部の教育機関、特に学校にしつけを依存するようになってきている。

イメージ2 家庭の教育力の低下が、青少年の凶悪犯罪の増加を生みだしている。

イメージ2-A 近年、青少年の凶悪犯罪が増えている。

イメージ2-B それは、家庭の教育力の低下が大きな原因の一つになっている。

イメージ3 家庭の教育力を高めることが、現在求められている方向である。

昔の家庭？

ところで、普通、昔の家庭というときどれくらい昔を想定するのでしょうか？自分の経験から考えているはずですから、60代の人なら50年くらい前とか、数十年前のことはずです。この本は、明治時代の後半の家庭に関する調査から調べていますから、だいたい100年前から現代にいたるまでの、家庭、地域、学校の関係をしつけという面から検討しています。

しかも、同じ家庭といっても、農村部か都市部か、裕福な層か貧困層かによって、昔ほど大きな違いがあるわけですから、その違いにも注意しないとイケません。

明治後半から昭和最初にかけての農漁村での家庭

家庭でのしつけの状態を聞き取り調査してみると、調査者の意図に反して、そこには、独立した<家庭教育>は存在せず、家族が抱える問題の中で、子供の問題は優先順位が低く(経済問題が重大) 親子関係に意図的な教育は存在しなかった。その一方で、家の手伝いなどの「労働しつけ」はきびしかった。

また、当時の地域の教育力？である「村のしつけ」は、しばしば幸福なものだったよう

に語られるが、差別や抑圧（目上の人には歯向かうなど）が組み込まれ、生活の中で自然に学ぶ人間形成は、しばしば望ましくない結果（悪い遊びを覚えさせられたり）を生み、家族が離散したり共同体からはみ出した子供たちは、アウトサイダーとして生きるしかなく、また、「村のしつけ」はローカル・ルールで、村を一步出るとまったく通用しないものであった、などの問題点があった。

大正から昭和初期の都市下層では

都市下層では、狭い長屋の一室に複数の家族が住んでいたり、親が子供を置いていなくなってしまうと、家族という単位がしっかりしておらず、初めての国勢調査が行われるようになった1920（大正9）年のころにやっと世帯単位で把握できる程度に家族のまとまりが作られるようになった。そこでは、共稼ぎの場合は、子供は仕事のじゃまなので不相応なほどの小遣いを与えられて外に出されたり、母親が主婦の場合でも、「隣近所の人々とお茶を呑みつつ、我が子の行動などには皆目無関心で、雑談にふけてその日その日を無意味に暮らしている」か、実際にはやはり内職などで忙しく、子供にかまってはもらえなかった。

都市裕福層の家庭では（「教育する家庭」のはじまり）

明治後半から出され始めた母親向けの育児書は、当初は医学的な知識を前提とした、就学前の乳幼児の世話の仕方を教える解説書だったが、1910年代（大正期）になると、家庭で育児・しつけと教育のノウハウを親向けに教えるガイドブックになった。その背景には、明確な性別役割分業を前提に、親（特に母親）こそが子供の意図的な教育の責任を負っており、地域の近隣や親族のネットワークに人間形成機能をゆだねない、という新中間層の教育意識が反映されている。そこには、<子供らしさ>を尊重する童心主義と、<こどもらしさ>を否定する厳格主義と学歴主義という矛盾した考えが混在しており、それはそのまま、現在の家庭教育や学校教育の問題につながっている。

1950年代の親子関係

上に書いた状況が、終戦後少したった1950年代まで続き、そのころの親子関係を分析した教育学者によると次の3タイプの親子関係の歪みがあった。

上層の有産階級の家庭

親は子の幸福を財産や地位との関係で見、子の人格において見ない。

中層の中産階級

できるだけ高い教育を受けさせることによって、自己の家とその子の社会的地位を向上させようとする欲求が目覚め、結果として他人を押しつけるようになる。

下層の無産階級

親が子に手伝・労働を絶対無条件的に要求し、子はこれに絶対的な恭順の態度で服従しなければならないという、古代からの奴隷的な親子関係。

高度成長期がもたらしたもの（1950年代後半～1970年代）

高度成長期に農村では、青少年が都会へ流れ込み、農家の兼業化が進み、挙家離村も増加し、学校は子供の将来の進路を具体的に保証してくれる装置として頼りにされ、<学校の黄金期>を迎えることになる。しかし、同時に、明治初期には「旧慣の克服」という進歩的な意味を含んでいた生活指導や集団訓練は、単に生徒たちを集団としてコントロールするための保守的な意味になってしまった。

そして、社会全体が裕福になり、「教育する家庭」が社会全体にひろがってきた。

家庭こそが子供のしつけの中心の場に

高度成長期の終わりのころ(1970年代後半)に、「教育する家庭」が社会全体にひろがるとともに、家族と学校の力関係において、家族のほうが優位になり、管理教育や横行する体罰を告発するルポルタージュや手記が多く出版されるようになった。

結果として、子供の教育に関する最終的な責任を家族という単位が一身に引き受けざるを得なくなった。

一方、青少年犯罪については

非行青少年犯罪が社会問題として盛んに議論されるようになったのは大正期(1910年代)からで、当時は<もともと非行青少年を生みやすい下層の青少年>と<家庭のしつけを誤ると非行に走ってしまう豊かな階層の青少年>の2面があり、下層の家庭の場合、しつけをちゃんとすれば非行少年がいなくなるというようなレベルの問題としてとらえられてはいなかった。逆に豊かな階層の青少年については、親の金を使い込んだり女学生を誘惑したりするような、下層出身者ではほとんど無視されるような軽度な「逸脱」が「不良」の問題として重視され「家庭のしつけの失敗が非行を生む」という物語が作られた。

やはり高度成長期が転換点

高度成長によって貧困や崩壊家庭を主原因にした下層の非行と、家庭のしつけの失敗による中流以上の階層の非行という区分が消滅してしまった。

1950年代までは、10代少年の起こした個々の事件が報道されることは少なく、その非行の性格は大人と同様の「犯罪問題」としての面が大きかったのに、高度成長期に「犯罪問題」と「教育・しつけ問題」が混在するようになり、その後は「教育・しつけ問題」が大きく取り上げられるようになった。

問題点は？

こうやって検討してみると、この100年の間では今ほど家族の結びつきが強い時代はなく、親が子供の教育に全面的に関わる時代もない。そして、そこから2つの問題が生じる。

「教育する家庭」になることのできない家族の問題と、「教育する家族」が牢獄のような逃げ場のない人間関係になってしまった家族の問題。

青少年の凶悪犯罪はほんとに増えているのか

例えば、「昔はナイフを持っていても人を殺すことはなかった」とまことしやかに語られるが、1960年代(今から40年前)に「少年に刃物を持たせない」運動が起こったのは、青少年の刃物による殺傷事件が相次いだからで、殺人による検挙少年の推移を統計で見ると、戦後から1970年代まで年間300人から400人の少年が検挙されているのに対して、現在は年間100人程度で推移しており、激減しているのがわかる。凶悪犯罪が増えているのはというのは長期統計で見れば、明らかなウソである(数年単位で見れば増えているかもしれないが)。

最後に少し長い引用

どうまとめようかと考えていたのですが、最後の3ページを引用することにしました。

かつては保守派のがしきりに主張してきていた「心の教育がなされていない」「家庭のしつけがダメになっている」といった論が、現在では政治的立場を越えた国民的総意(「大人の」という限定をつけてだが)となってきた観がある。しかしながら、ここでみてきたように、そこにはいくつもの誇張や短絡が存在している。しつけについていえば、全

体として、家族のしつけは衰えるどころか、以前よりはるかに熱心になされるようになってきている。青少年による凶悪事件も、60年代に比べればはるかに数も減り、非行の大半は、万引きや自転車・オートバイ泥棒のような、「ちんけな」逸脱で占められている。わが子のしつけに不安を持つ人は少なくないが、おおかたの青少年はうまく育っている。

確かに、社会全体で見ると、現実の家族や子供は多様で、中にはしつけ行き届かない家庭があるのは事実である。また、ほとんどの子供は親の期待する通りの「よい子」に育つわけではないのも事実である。だが、そのことは、社会全体で家庭のしつけが衰退していることを意味しているわけではない。むしろ、かつての時代に比べたら、総じてどの家庭でも子供のしつけに時間や情熱をそそぐようになってきている、ということを書きでは強調してきた。

ただ、かつての農村とちがって、今は、家庭こそが子供のしつけ・教育の責任を担うべきだという社会のしくみになった。そうであるがゆえに、その責任を担いきれない家庭が生じてしまうのが目につくのである。

先般、中教審の答申が示したような方向 家庭教育をもっと充実させるといった方向は、貧困家庭や離婚家庭のサポートなどにつながっていけばそれはそれなりに意味があるかもしれないが、私が危惧するのは、「しつけは家庭でちゃんとやれ」という発想が、今以上に個々の家庭に重い責任を課し、その責任を担いきれない親たちをさらに追い詰めることになりはしないかということである。

「もっと子供のしつけに熱心になれ」と言われてもそれどころではない、多忙な親や不和な夫婦もあるだろう。いくら親が注意を払ってしつけをしていっても、思いがけない、とんでもないことをしてかしてしまう子供に育ってしまう可能性はゼロにはならない。しつけや教育というものは、しょせんその程度のものでしかない。

「子供が事件を起こすのは家庭のしつけの責任だ」などと決めつける議論は、実際に子供が事件を起こしてしまった家庭の親を社会的に孤立させ、ただでさえわが子のしつけに不安を抱く多くの親たちの不安をあおりたてる。家庭のしつけにさまざまな問題の原因を求める議論は、すべての親に「完璧な両親」になることを求めるのだが、そんな時代はくるはずがないし、それがもし実現したらずいぶん気持ち悪い社会になるはずである。人間の生き方は多様だし、親はそもそも子供のためだけに生きているわけではないのだ。

社会としてとりあえず必要なのは、家庭のあり方は多様だし、その中にはしつけに配慮する余裕のない家庭もある、ということを前提としながら、今の社会に起こってくるさまざまな青少年の事件は、本当の親のしつけが主因なのかどうかを冷静に検討しなおすことなのではないだろうか。

今の社会で、善意でまことしやかに語られていることが、実際には間違いも多く、その間違った常識によって、自分で自分の首を締めていることになっているというか、どんどん息苦しい世の中にしてしまっているということに、もっと注目して欲しいと思ってこんな資料を書きました。